

戦後シンガポールの活気と混乱

アフマド・ルトフィ名義の小説群(1948~1950年)をもとに

山本 博之

本稿は、シンガポールで刊行されたマレー語月刊誌『カラム』(1950~1969年)の創刊者であるエドルス¹⁾が『カラム』創刊前に発表した小説をもとに、エドルスが1950年頃のシンガポール社会をどのように捉えていたかを整理する。その上で、小説を用いて「千一問」をはじめとする『カラム』の情報を捉えることについて考えてみたい。

エドルスの執筆および出版に関する研究には、包括的な[Talib 2002]があり、現在までこれが最もよくまとまった研究だと言える。エドルスの個別の小説を分析の対象とする研究には、例えば『69号室』を分析する[Hooker 2000]がある。論集の[Hashim & Mohd. Hanafi 2019]は、戦争と女性、戦後の混乱と道徳、宣教、子ども、道徳などのジャンルごとにエドルスの小説を論じているが、その多くの章は[Talib 2002]を再構成したもので²⁾、独自の研究成果として見るべきものはあまりない³⁾。

1. エドルスの経歴と小説出版

エドルスの経歴を簡単にまとめながら小説の執筆と出版について概観しておこう⁴⁾。エドルスは1911年

にカリマンタンのバンジャルマシンで生まれ、1930年にシンガポールに移住してジャーナリズムの道を歩んだ。第二次世界大戦後にマラヤに復帰したイギリスは、1946年、イギリスの影響下にあったマレー諸国を単独の植民地であるマラヤン連合に再編する計画を発表した。マラヤン連合案がマレー人と非マレー人に対等の地位を与えることが知られると、マラヤのマレー人民衆から大きな反対運動が起こった。エドルスも同年に『マラヤン連合』(Malayan Union)を出版し⁵⁾、副題に記したように「マレー人の声を国会へ」届けようと試みた。

エドルスは1947年7月にウトゥサン・ムラユ(Utusan Melayu)社に職を得ると、同社で働く傍ら、友人から借金して個人で印刷機と紙を購入し、『パレスチナの聖戦』(1948年)を出版した。執筆だけでなく印刷・製本も配送もほぼ1人で行い、1冊ずつ売りながら借金を返済していった。しかし、同時代の政治状況を描いた『パレスチナの聖戦』は『マラヤン連合』と同じ道を辿り、どちらもほとんど売れなかった。エドルスは方針を大きく転換し、1948年から1951年までにアフマド・ルトフィ名義で25冊の小説を刊行した(表1)。

初期に書かれた『戦場からの帰還』、『この世の地獄の残り』、『生きている死体』は、戦争および戦時中の日本軍による支配によって引き起こされた人びとの苦しみを描いた。それ以降は、妊娠したが出産も結婚も認められない女性が命を落とす話(『69号室』)、父親に管理された娘が夫ではない男性と情交を結ぶ話(『寡婦』)、出張先や職場で出会った女性と次々に性的関係を結んだために妻を失う話(『支配人』)、富裕なアラブ人男性が華人女性に騙されて財産を全て失う話(『神を欺く』)、夫と子を失って生活のためにナイトクラブで働く女性が失意の中で死ぬ話(『ウェイトレス』)、マレー人男性が出張先で女性と次々に性

- 1) エドルスは複数の筆名で執筆活動を行った。本稿で扱う小説はいずれもアフマド・ルトフィ名義で書かれたものだが、本稿ではエドルスで統一する。
- 2) [Talib 2002]に見られる誤記が[Hashim & Mohd. Hanafi 2019]にそのまま記載されている。たとえばエドルスが刊行した文学批評の[Persuratan Melayu]は、第1巻が「Prosa」、第2巻が「Puisi」、第3巻が「Drama dan Perkembangan Bahasa Melayu」であるが、[Talib 2002]は第1巻と第2巻を「Prosa」、第3巻を「Prosa Drama dan Perkembangan Bahasa Melayu」と誤記し、[Hashim & Mohd. Hanafi 2019]ではこの誤記が踏襲されている。また、[Talib 2002]の小説「Sultan Balun」は「Sutan Balun」の誤記で、これも[Hashim & Mohd. Hanafi 2019]で踏襲されている。誤記と別に、[Hashim & Mohd. Hanafi 2019]は11人の著者による11の章から成り、ほとんどの章の冒頭でエドルスの紹介が繰り返され、しかも章ごとの記載内容に齟齬が見られるため、たいへん読みにくい。
- 3) エドルスの小説をオリジナルの書籍で確認するのは難しいが、マレーシア国民大学のマレー世界・マレー文明研究所(ATMA)はマレー世界で刊行された文献を公開しており、本稿で扱う25冊の小説の半数以上をオンラインで閲覧することができる。
- 4) エドルスの経歴は[Talib 2002]による。[山本2002]も参照。

- 5) これより前の1941年、エドルスは『第二次世界大戦の歴史』(Riwayat Perang Besar yang Kedua)を出版していた[Talib 2002: 49]。

表1 アフマド・ルトフィ名義で出版された小説

刊行年	原題	邦題
1948	1374 Hari Berjuang	1374日間の闘争
1948	Balik dari Medan Perjuangan	戦場からの帰還
1948	Sisa Neraka Dunia	この世の地獄の残り
1949(*1)	Bangkai Bernyawa	生きている死体
1949	Bilik 69 [Korban Nusyuz]	69号室 [不服従の犠牲]
1949	Cukria	チュクリア
1949	Empat Kali Haram [Tuan Guru Mata Keranjang]	四重の禁止 [色情狂の宗教指導者]
1949	Geylang Serai Karam [Kerana Joget Moden]	ゲイランセライが沈む [今風のダンスのせい]
1949	Hoki	ホッケー
1949	Janda	寡婦
1949	Manager	支配人
1949	Menipu Tuhan	神を欺く
1949	Pelayan	ウェイトレス
1949	Saudagar Indonesia	インドネシアの商人
1949	Subuh di Tepi Laut	海辺の夜明け
1949	Terkorban di Bilik 69	69号室の犠牲者
1950	Anak Angkat	養子
1950	Bilik 69 di Bandung [Saudagar Malaya Melawat Indonesia]	バンドンの69号室 [マラヤ商人、インドネシアに行く]
1950	Gua Musang	グア・ムサン
1950	I Love You	アイ・ラブ・ユー
1950	Tuan Kadi	カーディどの
1950	Ustazah	女性教師
1950	Utusan Murtad	背教者の使い
1951	Kawan Syaitan	悪魔の友達
1951	Meja Tiga Belas	13番テーブル

出典:[Talib 2002: 159-160]。

注……原題のローマ字表記は [Talib 2002] に従った。別題があるものは [] で示した。

*1 [Md. Sidin 1998] では1948年。

的關係を結んで破滅する話(『バンドンの69号室』)のように、戦時下または戦後を舞台に、エドルスが考える墮落によって男女が破滅する作品が多く書かれた。

エドルスは1950年7月に月刊誌『カラム』を創刊し、1951年9月にカラム出版 (Qalam Press) 社を設立した⁶⁾。これ以降、エドルスは『カラム』発行に力を注ぎ、小説の出版は行わなくなる⁷⁾。

マレー文学研究では、エドルスの小説は性的に煽情的なもので文学的な価値は低いと評価されること

が多い。エドルスは約10年後に当時を振り返り、文筆家は生活のために自分の魂に合致していなくても読者が求めるものを書く必要があるとしたうえで、読者が求めるものとは同時代で進行中のできごとであり、新聞に毎日記事が掲載されて人びとが熱く話題にしている間に小説を刊行すると売れ行きがよいと書いている [Talib 2002: 8]。

カラム出版社を設立した後も、エドルスは自分の子どもたちに事業を継がせることを考えず、ほぼ1人で『カラム』の刊行を続けた。政治指導者や宗教指導者を臆さずに批判したため、マレー人政党から不買運動を呼びかけられ、イスラム法学者から「買うこと、読むこと、用いること、書くこと」の4つを禁じる宣告を出され、カラム出版社の経営が壊滅的な打撃を受けたこともあった。それにもかかわらずエドルスが事故で亡くなるまで20年にわたって『カラム』の刊行を続けたことは、社会にメッセージを伝えたいというエドルスの意志の強さを示している。

エドルスは性的に煽情的な小説ばかり書いていたという評価には、政治指導者や宗教指導者を批判し続けたエドルスを低く評価しようとするマレー人主流派の意識が反映されていた可能性があるのではな

6) カラム出版社は1953年4月に子ども向け雑誌『子ども』(Kanak-Kanak)を創刊した。『子ども』はジャウィ文字のマレー語で書かれ、月に2回刊行された。エドルスは「5分のお話」(Cerita Lima Minit)というコラムに1ページ程度の短編小説を書いた。「5分のお話」については [Shahrin Nizal 2019] を参照。『子ども』は、ウトゥッサン・ムラユ社が刊行した子ども向け雑誌との競合などのため、創刊から数ヶ月で刊行を停止した。『子ども』については、1953年4月号から10月号までのローマ字翻訳付き復刻版 [Yamamoto 2017] がある。

7) エドルスは1950年代末から1960年代初めにかけてA.E.エドルス名義で本を刊行している。1958~1960年に宗教指導者を紹介する本を13冊、1962年に子ども向けの民話や小説を19冊出版している。なお、子ども向けの民話や小説の刊行時期に関して、[Talib 2002] では1962年(1冊のみ1948年)としているが、シンガポールのマレー語日刊紙 (Berita Harian) に掲載された出版広告の初出は、1961年1月30日に8冊、1961年10月31日に7冊、1962年1月28日に4冊となっている。また、同紙の出版広告には [Talib 2002] で言及されていない本が2冊掲載されている。

いか。性的に煽情的で、ときには猟奇的な表現を取り入れつつも、そのようにして読者に届けた本を通じてエドルスが伝えようとしたことを理解することは、『カラム』発行を通じてマレー世界のムスリムに望ましい社会の実現を訴え続けたエドルスが当時のマレー世界の社会をどのように認識していたかを知る上で重要であるとともに、政治的な立場から離れてエドルスのマレー文学研究における位置づけを捉え直すという意義もある。

以下では、エドルスが1948年から1951年にかけて執筆・刊行した25の小説の主なものについて、(1)戦時下で人間性が否定される様子、および戦後復興の活気と混乱の中で、(2)夫を失った女たちが苦境に陥って破滅する様子、(3)地位と金を得た男たちが道を踏み外す様子の3つに分けて、関連するエピソードの一部を紹介する。

2. 戦時下で人間性が否定される

シンガポールを含む東南アジアの国々は第二次世界大戦中に日本軍による支配を受けた。『この世の地獄の残り』と『生きている死体』は、日本軍が現地で徴用した労働者であるロームシャを題材としている。『この世の地獄の残り』では、ロームシャたちは囚人や動物のように扱われ、帰国できずに命を落とす人もいる。『生きている死体』ではロームシャは帰国し、自分と同じ状況に置かれて命を落とした同胞たちの弔いを行う。その献身的な態度によって、この世の地獄がなお続いていることが際立たされる。

『この世の地獄の残り』⁸⁾

第二次世界大戦中のシンガポール。レマンたちはロームシャとして集められる。30人程度の男たちはみな腰巻1枚程度の簡素な格好だったが、日本兵に命じられて着の身着のまま列車に乗り、マラヤ鉄道で北上してタイのチュムポーンにある作業現場に向かう。キャンプでは、寒くても毛布は与えられず、食事も粗末なものしかなく、飢えと夜の寒さに耐えなければならぬ。午前6時に起こされ、4マイルの距離を歩いて作業場に行き、昼の暑さの中で土木作業

を行い、再び4マイルの道を歩いて宿舎に帰りつくのは夜10時で、そこでの日々は「この世の地獄」だった。現場監督のブンガリ人は日本兵の前ではロームシャに厳しくあたる。ムハンマドが現場監督に反抗すると、現場監督は日本兵に報告し、日本兵が見ている前でムハンマドを殴り、倒れたムハンマドを靴で踏みつける。それを見たロームシャたちは、囚人や動物のように扱われても決して現場監督に逆らおうとしなくなった。ロームシャたちは命がけでキャンプから脱走してシンガポールに戻ろうとするが、ムハンマドはその途中で電車から落ちて死ぬ。

『生きている死体』⁹⁾

スラバヤでロームシャになったジャワ人のマス・ラフマツは、1939年にシンガポール経由でタイ南部に送られ、そこで痩せ細って「生きた屍」のようになった約30人のジャワ人ロームシャとともに鉄道建設の土木作業に従事する。シンガポールに戻って体調が回復したマス・ラフマツは、ロームシャや他のジャワ人の遺体がどのように扱われているかを知るため、富裕なアラブ人アルサゴフの寄付によるムスリム寄進基金協会¹⁰⁾が管理する貧困層向けの埋葬地のボランティアになる。この埋葬地では、1943年と1944年には毎月1,000人以上が埋葬され、ボランティア8人ではとても人手が足りない。遺体は埋葬地に1日2回運ばれてくる。一度目は病院からで、亡くなったばかりなので遺体の状態は悪くない。二度目は道端で死んでいたジャワ人やロームシャの遺体で、亡くなって数日が経って悪臭がひどく、一度嗅ぐとめまいが何時間も続くこともある。それでもマス・ラフマツはイスラム教徒が負っている埋葬の義務を果たすという意識をもって同胞たちの遺体を埋葬し続ける。

3. 夫を失った女たちが破滅する

1950年頃のシンガポールのムスリム社会では、女性には夫に扶養されないと生活できなかった。戦争や他の理由で夫を失った女性たちは、自分や子どもの

8) 『この世の地獄の残り』(1948年1月刊行)の前書きには、1946年4月にシンガポールの英語日刊紙に掲載された記事「Jap "Death Railway" Trials to Begin Soon: Over 100,000 Died on Forced Labour」(The Straits Times, April 27, 1946)に着想を得て執筆されたと記されている。

9) 『生きている死体』(1949年5月刊行)の前書きには原稿は1946年に執筆されたと記されている。

10) ムスリム寄進基金協会 (Muslim Trust Fund Association) は1904年にシンガポールのムスリムの相互扶助のために設立された実在する組織。Syed Mohamed bin Ahmad Alsagoff (通称Nong Cik, 1836-1906)によって設立された。[光成 2018: 168]を参照。

生活のために再婚するしかなく、何らかの事情で再婚できなければ接客業などで自活するしかなかったが、不特定の男性客を相手にする接客業はしばしば不道德であると見られた。夫を失ったことはその女性が責任を負うべきものではなくても、女性がどの道を選んでもエドルスは厳しい目を向けた。

初期に執筆された『戦場からの帰還』では、夫が戦死したと聞かされた女性が再婚するが、夫が生きて帰ってきたため、女性は自分が不貞を働いたと自責の念を抱かされる。それ以降の小説では、夫を失って生計を立てるのが難しくなった女性たちが苦境に陥る。『69号室』では妊娠しても子を産むことが許されず、『ウェイトレス』では産んだ子を自分で育てることがかなわず、『寡婦』では結婚のあてがないまま妻帯者と性的関係を結ぶ。

『戦場からの帰還』

第二次世界大戦後のシンガポール。ジャワ人のカスマンは妻マリアマと2人の息子と暮らしている。カスマンは海軍の制服を着たマレー人青年の訪問を受ける。青年はマリアマの元夫サリムの友人で、戦場から戻ったサリムが息子たちに会いたがっていると言う。サリムは4年前に従軍し、乗っていた船が沈んだと知らされたマリアマは、2人の子を育てながら夫を探し続けた。しかし若い女性が独身であると好奇の目で見られ、富裕なインド人ムスリムたちから求婚されるため、貧しくても人柄がよいカスマンの求婚を受け入れた。2人は1年前に結婚して、マリアマのお腹には4ヵ月になる赤ちゃんがいる。マリアマは自分が不貞を働いたとってしまうのでサリムに会いたくないと言うが、敬虔なカスマンは神の意志だからとサリムを家に招く。下の子のカシムは生後4ヵ月のときにサリムと別れたのでサリムを見てもわからないが、上の子のアフマドはサリムを見ると懐に飛び込み、4年ぶりに父と抱き合う。サリムは、自分の暮らしを楽にするために子どもたちに2人の母を持たせることはできないと思って再婚しなかったが、自分の不在中に子どもたちに2人の父を持たせてしまったと息子たちに詫げる。サリムは息子たちと一緒に暮らしたいと言うが、受け入れられないマリアマは謝って涙を流すしかない。

『69号室』

50歳で独身のラティフは市場で買い物する女性た

ちを見てはからかっていた。夫から離婚されていた若いナイマは自分をからかうラティフに魚を投げつけて反抗する。公衆の面前で屈辱を与えられたことを恨んだラティフは、ナイマに復讐するため、ナイマを妻にして自分に服従させようとする。ナイマは騙されてラティフとの結婚を仕組まれ、カディ(裁判官)はラティフから賄賂をもらって2人の結婚を認める。ナイマはラティフの妻として振る舞うことを拒絶するが、カディによって妻の不服従にあたと宣告され、ラティフに扶養を求めると別の男性を夫にすることでなくなる。ナイマはブスと親密になってホテルの69号室で情交を結び、妊娠するが、ナイマは妻の不服従が宣告されていてブスと結婚できない。ナイマは父がいない子を産むと世間に顔向けできないと考え、ブスは墮胎する薬を手に入れてナイマに渡すが、絶望したナイマは薬を過剰に摂取して死ぬ。

『ウェイトレス』

ラフマは夫から離婚され、隣人で寡婦のカティジャの家に住まわせてもらう。カティジャはナイトクラブで働いている。ラフマは妊娠中で働くことができず、出産までカティジャがラフマに食べ物と飲み物を与える。ラフマは無事出産するが、仕事がなく生活の余裕がなかったため、子どもを他人に渡さなければならなかった。ラフマは、カティジャの説得もあり、収入の高さに惹かれてナイトクラブで働くようになる。ラフマは不道德の谷に閉じ込められ、結婚することなく複数の男性と自由な恋愛と交際に漂い、貧困状態で暮らして梅毒で死ぬ。

『寡婦』

裕福な家に暮らすジャーと姉は、英語教育を受けて育ったために自由な考えに触れており、父親から毎月多額の小遣いをもらっているため生活に不自由はないが、母親が心配するので1人では家から外に出ないという決まりを守っている。ジャーは結婚するが、父親はジャーが家を出て暮らすことを認めず、結婚後も実家に住み続ける。ジャーの夫はジャーの父親の閉鎖的な態度に我慢できずにジャーと離婚する。ジャーのいとこのフセインは、妻帯者であるが、ジャーの父親に気に入られており、頻繁にジャーの実家を訪れてしばしば寝泊まりし、ジャーとは兄と妹のように付き合っていた。ジャーはフセインに

恋心を抱くようになり、寡婦として2年間すごしたジャーは欲望の谷から抜け出すことができなくなって、自分の夫ではないし妻帯者であるにもかかわらずフセインと情交を結ぶ。

3. 地位と金を得た男たちが道を踏み外す

第二次世界大戦後、シンガポールでは戦争の荒廃から復興するための再建事業が進められ、戦前の富裕層だったアラブ系やインド系の他にも社会的地位や財産を手に入れる人も現れた。再建事業による活気は道徳の混乱も招き、男たちはザカート（喜捨）から逃れようとしたり飲酒したりしてイスラム教徒としてあるべき道を踏み外し、そのため破滅を迎える。『神を欺く』では富裕なアラブ人が財産をすべて失う。『支配人』では会社の支配人、『バンドンの69号室』ではビジネスマンが、それぞれ海外の出張先で女性の接待を受け、我を忘れて道を踏み外す。

『神を欺く』

アラブ人のハビブ・ダルウィッシュは賃貸住宅の事業を営んで多くの資産を持っている。彼は借家人から雨漏りがすると言われても修繕しようとしないうほどのケチだった。ザカートの支払いを免れるために家をもう1軒購入して賃貸にまわし、金を貸して利息を取る事業も行っている。ハビブは家庭生活でもケチで、マレー人の妻ハリマは食事を贅沢にすることが許されず、食事は細かく切った塩漬け魚でご飯を食べただけだった。ある日、ハビブは鶏肉を買ってきてハリマに料理を命じる。ハビブは自分よりも先に妻が食べることを許さなかったが、ハリマは料理中に我慢できずに鶏をすっかり食べてしまい、それを知ったハビブは卒倒して死ぬ。ハビブの財産は息子のムハンマドの手に渡り、ムハンマドと2人の弟は贅沢な生活を送る。ムハンマドは詐欺師の華人女性と結婚する。ムハンマドがアルコール中毒で死ぬと、その財産は妻の名義に書き換えられていたため、2人の弟は何も得られなかった。

『支配人』

製織会社に勤めるマレー人のノルディンは、独立して自分の会社を経営する野心を抱いている。会社を辞めて自分の会社を作り、前の会社の元同僚たちを説得して自分の会社に引き抜く。支配人になった

ノルディンは、神の教えに従った暮らしを嫌って贅沢な生活を送る。ノルディンが部下たちに傲慢で無礼な態度で臨んだため、多くの従業員が会社を去る。戦争が始まると会社が日本軍に接収され、ノルディンはビジネスを学ぶために日本に派遣される。ノルディンはシンガポールにフィリピン人の恋人リリーがいたが、日本人女性に楽しませられてリリーのことを忘れ、それを知ったリリーはノルディンと別れる。シンガポールに戻ったノルディンはリリーを探し出して結婚するが、ノルディンは秘書になったマイムナと関係を持ち、それを知ったリリーは自殺する。ノルディンは後悔のあまり精神を病む。

『バンドンの69号室』

1950年4月、シンガポールのビジネスマンのステインが仕事でインドネシアに出発しようとしているところに親友のスライマンに出会う。2人は「いつもの飲み物」と注文した酒を飲みながら談話する。スライマンは、インドネシアに行けばいろいろな女性と懇ろになるだろうからと言い、それを諫めるのではなく、梅毒を防ぐためにペニシリン注射をするよう助言する。しかしステインは、仕事に行くのだから現地の女性と交際することはないと断言し、スライマンの助言を聞かない。インドネシアに向かう船中でステインはメダン出身のノルマと知り合い、ノルマが身につけていた官能的な香水の匂いに惹きつけられてノルマと情交を結ぶ。ジャカルタに着くと、戦争で夫を失って生計が立てられなくなった10代の寡婦たちが春を鬻ぐ地区を訪れ、複数の女性と情交を交わす。仕事先のバンドンでは、知り合ったマリアから、この土地では来客を家に泊める慣習があると言われ、言われるままにマリアの家でマリアと同じ部屋で寝る。ステインは梅毒にかかり、自分の軽率な行動を後悔する。

4. 小説と「意味の束」

エドルスは新聞等を通じて現実のシンガポール社会で起こっていることを知り、それをもとに小説を書いた。小説はフィクションだが、現実社会のできごとを題材にしており、したがって現実社会に対するエドルスの考え方が色濃く反映されていた。エドルスの考え方は『カラム』の記事に見ることができ、とりわけ「千一問」によく表れている。「千一問」の質問

と回答の内容は多岐にわたり、それらの中にはここで紹介した小説の内容と重なるものがある。2つ例を挙げよう。

『69号室』では、女性がカディによって妻の不服従を宣告され、夫から扶養もされないし離婚もできない状況に置かれる。「千一問」に、夫に不服従である妻に対して夫が離婚しないけれど扶養もしないことが行われており、カディの多くはこのことを認めているが、これをどのように考えるべきかという質問が寄せられている(1953年11月号)。回答は、妻が不従順だったとしても、夫が離婚もしないが扶養もしないことはイスラム法で認められていないとし、コーランの関連する章句を示して、不従順な妻に対して夫が採るべき措置を挙げる。夫による扶養拒否を認めるイスラム法の文言はなく、たとえ夫への怒りのために妻が家を出たとしても夫は妻に対して扶養の義務があるとする。

『ウェイトレス』に関連して、なぜイスラム教徒の女性はウェイトレスになる人が多いのか、それは法的にどのように判断されるのかとの質問がある(1952年7月号)。回答は、ウェイトレスとして働いている女性の大半は、夫に去られ居場所も与えられないまま子どもを育てている女性、両親や親戚を扶養しなければならない女性、夫に放っておかれるなどして傷心を抱える女性などであり、このような女性たちは、その職に就くほかに収入を得る方法がないため、生活のためにウェイトレスとして働くことは許されるとする。ただし、ウェイトレスになった女性の中には、飲酒し、尊厳を売るなど、イスラム教で固く禁じられている行為に至る者もいるとし、その文脈においてウェイトレスを「宗教だけでなく社会一般からも咎められるような仕事」と呼ぶ。その上で、彼女たちは救済が必要な人たちであるが、シンガポールの宗教行政が十分でないため、彼女たちを低劣な状態から救い、過ちを悔い改めさせるような取り組みはなされていないと評する。

これらの他にも、「千一問」には、飲酒が禁じられていることについて(1950年3月号、1966年8月号)、所得税を払っていればザカートを払う必要はないという主張について(1950年9月号)、姦通によって生まれた子について(1951年3月号、5月号、1953年12月号、1966年7月号)、マレー人は地位や職位が高くなると横柄になることについて(1952年7月号)など、小説の記述に関連する問答を見ることができる。

当時のシンガポール社会に対する認識が見られる小説と、当時のシンガポール社会がどのようにあるべきかを示す「千一問」とを対照させて参照することで、当時のシンガポール社会の様子およびそれをエドルスがどのように捉えていたかを具体的に捉えることができる。

このことを踏まえて、エドルスが発表した小説を用いることで『カラム』の記事、とりわけ「千一問」の質疑応答の全体像を捉えることについて考えてみたい。「千一問」は、区切り方にもよるが、全体で約700件の質疑応答から成る。その内容は多岐にわたり、全体像を大掴みにするのは容易ではない。

「千一問」の全体像を捉える方法として、光成歩により、「千一問」の質疑応答の分類が試みられている。西洋近代の発想を踏まえた分類の例として米国議会図書館分類法による「千一問」の分類を行った[光成2020]。その結果、「千一問」の質疑は、哲学・心理学・宗教、社会科学、地理・人類学・レクリエーションの3分野に集中し、十分に分類しきれない部分が残った。

これと別のアプローチとして、イスラム的な知の体系を踏まえた分類方法についても試みられているが(本論集所収の光成論文)、そこでも特定の分野に集中し、十分に分類しきれない部分が残っている。

これは、シンガポールを含むマレー世界が西洋文明やイスラム文明といった複数の文明・文化の交わりの地であり、そのため西洋近代またはイスラム的な知のいずれの分類方法でも単独では十分に分類できないことを意味している。「千一問」の約700件の質疑応答に即して両者を折衷する分類法が作られれば、それは世界の文明・文化の交わりの地であるマレー世界であるからこそ生み出された分類法として普遍性が高いものになることが期待される。

それと異なるもう1つのアプローチは、本稿の試みと関連している。大量の情報があって人力ではうまく分類しきれないとき、その情報群と密接に関わる情報のセットを想定し、その情報のセットとの結びつきを捉えることで大量の情報の全体像を捉えることができまいだろうか。「その情報群に密接に関わる情報のセット」とは、本稿の例で言えばエドルスが書いた小説群である。そこからいくつかの意味を抽出してまとめたものを「意味の束」と呼ぶならば、「意味の束」を介らせてそれらと結びつけることで、大量の情報を機械的な作業で仕分けすることが可能になるのではないだろうか。このことを意識して、小説

群をどのように整理すれば「千一間」または『カラム』の情報の把握ができるかについて、引き続き検討していきたい。

参考文献

- Hashim Ismail & Mohd Hanafi Ibrahim. (eds.). 2019. *Sejarah dan Tokoh: Ahmad Lutfi Pembangkit Semangat Zaman*. Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Hooker, Virginia Matheson. 2000. *Writing a New Society: Social Change Through the Novel in Malay*. Allen & Unwin.
- Shahrin Nizal Mohd Nor. 2019. “Sumbangan Ahmad Lutfi terhadap Perkembangan Kesusasteraan Kanak-Kanak: Suatu Kajian Awal”. [Hashim & Mohd Hanafi 2019:100-115] .
- Talib Samat. 2002. *Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah*. Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Yamamoto Hiroyuki. (ed.) 2017. *Kanak-Kanak*. (reprint with transcript in latin alphabet, April-October 1953.). CIRAS Discussion Paper No.74. Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.
- 光成歩 2018 「脱植民地化期シンガポールのイスラム法制論争：マレーシア地域における二元法制の起源」(東京大学大学院総合文化研究科博士論文)。
- 2020 「近代的な知の分類と東南アジアのムスリム社会——「千一間」質問群に見るムスリムの社会生活と知的関心の広がり」光成歩・山本博之編著 2020 『カラムの時代11——マレー・イスラム世界の女性と近代』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.16-22。
- 山本博之 2002 「英領北ボルネオ(サバ)におけるバジャウ人アイデンティティの形成」『東南アジア 歴史と文化』31: 57-80。